江口克彦著「国民を元気にする国のかたち――地域主権型道州制のすすめ――」
PHP 研究所 2009 年 1 月 7 日刊を読む

「謙虚な誇り」を持とう

１．禅の言葉に「随所に主となる」というものがあります。これはその時々、その所々で主体性を持って考えていくことを示唆した言葉です。まさに道州制の根本思想にもなり得る教えです。

２．随所というのはもちろんそれぞれの地域のこと。その一つ一つの地域が主とならなければいけない。中央から指示されるのではなく、東京と比較するのではなく、自らの地域を自分たちの力で発展させていく。東京のようになりたいのなら、それを目指せばいいでしょう。東京とは別の町をつくりたいのなら、東京などに目を向ける必要はない。あくまでも地域それぞれが主体となって町づくりをしていく。そういう発想を私は持っているのです。

３．自分から地方であることを卑下している。東京ばかりが素晴らしいと思い込んでいる。こういう発想をしている限りは、中央集権から脱することはできません。

４．松下幸之助の言葉に「謙虚な誇り」というものがあります。「謙虚な誇りを持ちながら経営をやっていきなさい」と私はよく松下幸之助から言われたものです。何事にも謙虚な姿勢で臨まなくてはいけない。成功したからといって奢(おご)る気持ちを持ってはいけない。それは人間として当たり前のことです。しかし謙虚さばかりが良きものではない。謙虚さも過ぎれば、それは卑下につながってしまう。自分を卑下することは、謙虚でもなければ美徳でもない。そして何事にも誇りを持つこと。自分が従事している仕事に誇りを持ち、自分自身の生き方にも誇りを持つ。ところがこれもまた謙虚さと同じ。誇りも過ぎれば、それは傲慢さにつながっていく。

５．要するに松下幸之助は、謙虚さと誇りのバランス感覚を持ちなさいと言っているのです。素晴らしいバランス感覚だと思います。この言葉をもって解釈するなら、地方の人たちも「謙虚な誇り」を持つことが重要であると言えるでしょう。東京や他の地方都市の素晴らしい部分を認める謙虚さを持つ。しかしその一方で、自分のいる地域に対する誇りをもしっかりと持つ。そのバランス感覚を身につければ、やたら東京と比較することなど意味のないことであると気づくはずです。

６．時計の歯車を思い浮かべてください。時計の針を動かすために、大小いくつもの歯車が噛み合っている。では、大きな歯車のほうが小さな歯車よりも重要なのでしょうか。大きな歯車さ

えしっかりしていれば、小さな歯車はどうでもいいのでしょうか。それは絶対に違うでしょう。たった一つの小さな歯車が壊れてしまえば、もう時計の針は動かなくなってしまう。すべての歯車が元気でなければ、時計は時を刻むことはできない。

7．国家というのもまた同じです。お城の石垣にしてもそうです。大きな石があたかもお城全体を支えているかのように見えますが、その大きな石の隙間には小さな石がいっぱい詰まっている。小さな石が大きな石を支えるからこそ、お城が崩れることなく立っていられるのです。

8．つまり小さな歯車も小さな石も、それぞれが主体性を持って存在している。小さな歯車に人格を与えるならば、それらは確かな謙虚さと誇りを持って動いている。そういうものだと私は思っています。だからこそ「地域主権型道州制」なのです。

　地域が主体となって地域住民の幸せを考える。それぞれの地域は日本にとって不必要な歯車ではありません。地域という歯車が元気に動かなければ、やがて日本という時計は止まってしまう。禅の言葉である「随所に主となる」。松下幸之助の言葉である「謙虚な誇り」。この言葉をよく噛みしめなければなりません。

P25 ～ 27

［コメント］

　国の債務が 900 兆円に迫る状況の下で、いつまでも今の国のあり方のままで国家破産を先のばしにすることはできない。地域主権型の道州制の導入や消費税の引き上げなどで国家公務員の数や独立行政法人の数を激減させ、負担を子孫に残さないことが大切だ。今の自分たちの生活さえよければあとはどうなろうと何でもいいという態度は、本来の日本人の美意識や倫理観からは考えられない。「公共の精神」「高い志」をもう一度思いおこすことが大切だ。

－ 2009 年 5 月 16 日林明夫記－